

# アフリカの都市における若者の労働事情

——ウガンダ、カンパラでパフォーマンスを職とする人々を事例に——

平成 18 年度入学  
派遣先国；ウガンダ共和国  
大門 碧

キーワード；都市文化，都市人類学，集団，アクセス，非・専門化

## 対象とする問題の概要

アフリカの都市における労働問題は、切迫した状況にある。現金収入を求めて村から都市に出てくる人々の期待を裏切って、都市では悲惨な生活が待っている場合が少なくない。そんな中でも人々は、家族や民族のつながりを基礎にしながら、職を生み出し現金を獲得してきた。そして現在、都市部で生まれた人々、もしくは高等教育を受ける目的などで世帯を持たずに都市へ出てくる 10 代、20 代の若者が出現し始めている。それと平行して、都市に出稼ぎに来ながらも、出身村や自民族への所属意識が強かった時代から、親族や民族のネットワークを越えた社会関係を形成することを通して職が営まれる時代へと変化している。

私が派遣された東アフリカに位置するウガンダ共和国の首都カンパラでは、1970～80 年代のクーデターの歴史を乗り越えて、現在、経済が豊かになり好景気を迎えている。しかし一方では、かつては東アフリカの「東大」のような存在であったマケレレ大学を卒業しても、よい職につける者は多くないという現実がある。若者たちは教育レベルが重視される社会への変化に対応して、さらなる教育を受けるために、あるいは生活資金や親への仕送りを獲得するために、職を探している。



↑カンパラの中心部にある乗り合いタクシーパーク

## 研究の目的

本研究は、アフリカの都市において、近年新しく生まれている、パフォーマンスを職とする人々の労働事情を調べることによって、その職を生み出す現在のアフリカの都市社会に関する考察を深めることを目的としている。労働としてパフォーマンスをしている人々は、アフリカの都市社会の中でも多くはない。しかし、近年にその職業が成立してきた過程には、その背景にある都市の経済的、政治的、文化的実情が確実に映し出されていると考えられる。また、若い身体と若い感性が必要とされるこの職業は 10 代から 30 代という年代の若者たちが中心であるため、本研究は、アフリカにおける特に若年層の労働事情についての考察を見出すであろう。「パフォーマンスをする」という労働がいかに可能性がある

ものなのか、もしくはさらに若者たちを不安定労働に陥れることになるのかを明らかにすることによって、現在のアフリカ都市の労働問題を解決する一助になると考える。

### フィールドワークから得られた知見について

今回、私は、ウガンダ共和国の首都カンパラ（人口約 120 万人）において、約 3 ヶ月の調査をおこなった。カンパラには、どのようなパフォーマンスが存在するのか、そしてどのようなパフォーマンスが労働としての機能を果たしているのかを、多種のパフォーマーとの出会いを重ねることで、全体的に把握することを中心的な課題とし、今後に集中的な調査の対象とするパフォーマー集団を特定することに重点を置いた。



↑ Alex Mukulu の芝居風景 (National Theatre)

その結果、カンパラには多様なパフォーマンスがあり、さまざまなパフォーマンスグループが存在することが確認された。そのなかで職業として成り立っているパフォーマンスはそれほど多くはなかった。たとえば演劇パフォーマンスにおいて、チケットの売り上げで公演活動を実現させている経済力のあるグループに所属していても、そのパフォーマンスのみを職業としている者は少ない。音楽パフォーマンスの場合にも、スタジオで曲を録音するためには高額な資金を必要とし、また楽器の購入資金も安くはないため、音楽だけで生活している人は少ない。ダンスパフォーマンスに関しても、結婚式などに伝統的なダンスをおこなって現金を稼ぐ人々も

存在したが、グループ全員に十分に配当できるだけの収入を得ることは困難なようであった。

そのようななかで、グループの全員がそれなりの現金収入を得ることが可能なパフォーマンスとして、私が注目したのは「Karioki show」と呼ばれるパフォーマンスである。「Karioki show」とは、バーやレストランなどで、音楽をかけながら「マイム」とダンスを中心としたパフォーマンスを 3 時間近く続けておこなうショー・パフォーマンスを指す。この場合の「マイム」とは、既存の歌曲を大音量で流し、それに合わせていかにもその歌を歌っているように見せるパフォーマンスを意味する。このショーを行う集団（「Karioki group」と呼ばれている）は 10 代から 20 代の若者たち 15 人前後で形成されており、経済力をもつバーのオーナーなどに雇われているグループや、若者たちだけで経営しているグループがある。いずれの場合でも、パフォーマンスをする場所を週に 5 日確保できれば、最低限の生活資金以上の現金を手に入れることができる。このため「Karioki show」には、より高収入な他の職業や高等教育へのアクセスを求める若者たちが集まってくるのだと考えられる。



↑ Karioki show の様子 (Club Vogue)

### 今後の展開・反省点

今回のフィールドワークでは、カンパラにおけるパフォーマンスの実態を全体的に把握することに重点をおいたため、パフォーマンスを職とする「Karioki group」の人々については十分な調査ができない

ままに終わった。「フィールドワークで得られた知見について」で上述したように、若者たちに次のステップへと進むことを可能にする「Karioki show」というパフォーマンスは、都市の労働事情において非常に魅力的なものである。また労働としてのパフォーマンスには、先進国では専門化した技能を要求されるというイメージがあるが、「Karioki show」の専門性はさほど高くはなく、誰でも参入できることが若者たちにとっての魅力となっていると思われる。さらにまた、パフォーマンスを職にするということは、体力的に厳しい面があるものの、本人たち自身は楽しみながら働いていることも、確認している。



↑ Karioki showの様子 (Bamboo Spot)

この「Karioki show」が生まれたのは、聞き取り調査によると、ここ10年のあいだであると推測できる。今後は、このパフォーマンスが生まれてきた原因と背景を、カンパラという都市がもつ諸特徴との関連において解明したい。また、「Karioki show」がいかに経済的に成立可能なのかを収入と支出のデータを収集することから算出するとともに、「Karioki group」のメンバーがどのような人々なのかをライフヒストリーなどを集めることによって明らかにしたい。そうすることによって、都市におけるパフォーマンスという労働の意義や可能性を論じていきたい。さらにまた、アフリカ都市においてより働きやすい

環境とは何かを考えることを通して、若年層の労働者使い捨て問題がはびこる先進国の実情を批判的に考察することを可能にし、アフリカだけでなく先進国と呼ばれる国々の労働環境を改善する助けになればと考えている。